

〈音楽〉

思いや意図をもって表現する力を育む指導の工夫 — 音楽と学校生活とを結びつけた創作活動を通して（2学年） —

沖縄県立中部農林高等学校教諭 小 越 さつき

I テーマ設定の理由

高等学校学習指導要領解説音楽編（以下「解説音楽編平成21年」）において、音楽科の改善の基本方針として「音楽科の課題を踏まえ、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活のかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむこと等を重視する。」等が示された。「音楽科の課題」とは、「感性を高め、思考、判断し表現する一連のプロセスを働かせる力」や「生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化のよさを味わったり、生活や社会に生かしたり豊かにしたりする態度の育成」、「歌唱の活動に偏る傾向があり、表現の他の分野と鑑賞の活動が充分でない状況が見られるため、創作と鑑賞の充実を図ること」などである（平成20年中央教育審議会答申）。新しい知識・技能・技術が社会のあらゆる領域で重要性を持つ「知識基盤社会」の現代において、音楽科の学習を通して、豊かな感性や思考力・判断力・表現力等の育成が求められていることがわかる。

音楽科は「表現（歌唱・器楽・創作）」「鑑賞」の二つの領域により構成されており、特に、「表現（創作）」と「鑑賞」領域の指導の充実が求められていることが前述の課題から明確に示された。その課題を踏まえて、これまでの実践を振り返ると、歌唱や器楽については、生徒が意欲的、積極的に取り組む学習活動が行えていた。一方、創作活動については、充分に取り組めていない状況であった。これは、生徒に創作の基本的知識、技能、方法などを充分身につけさせることや、的確な題材の提示ができず、生徒のイメージを引き出すことや生徒の学習意欲を持続させ、創作に取り組ませることができなかったことなどが要因としてあげられる。

そこで、本研究においては生徒にイメージを持たせるように題材の提示を工夫し、創作の基本的知識、技能、方法などを身につけさせながら、生徒の実態を踏まえ、主体的に創作活動に取り組ませる指導の工夫を図りたい。

本校では、学校の特色を生かした「即売会」という独自の取り組みがあり、生徒たちは主体的に活動する姿が見られる。「即売会」と音楽の授業とを結びつけ、クラス全員で一つの音楽をつくりあげる活動を通して、生徒の意欲向上を図り、思いや意図を引き出すことができるのではないかと考えた。

以上のことから、音楽と学校生活とを結びつけた創作活動を行うことで、思いや意図をもって表現する力を育むことができ、授業に対する意欲向上を図ることができるであろうと考える。さらに、作曲を学校行事において活用することで、生徒の充実感や達成感につながり、音楽のよさや楽しさを実感させることが期待できると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

表現領域において、音楽と学校生活を結びつけた創作活動と作曲の活用の工夫を通して、思いや意図をもって表現する力を育むことができるであろう。

II 研究内容

1 思いや意図をもって表現する力

「思いや意図をもって表現する力」の育成については、小学校、中学校及び高等学校学習指導要領において、音楽科の改善の基本方針として重視されている。「思いや意図をもって表現する」とは、小学校においては「表現に対する自分の明確な考えや願い、このような音楽にしよう、といった意図をもち、その実現に向けて、試行錯誤しながら創意工夫する活動」と示されている。中学校においても生徒が自己のイメージを曲想と関わらせ、試行錯誤しながら創意工夫して表現すること、と読み取ることができる。つまり、表現したい音楽のイメージをもち、描いたイメージに合うように表現を工夫することだと捉える。

次に、表現したい音楽のイメージをもつということを具体的に考えてみると、例えば、「楽しい気分になるような軽快な音楽」、「静かに雨が降っているようなしっとりとした音楽」など、音楽が醸し出

す質的な雰囲気についてのイメージをもつことである。そして、描いたイメージに合うように表現を工夫するとは、表現したい音楽のイメージに合わせて、「軽快な音楽」であれば「テンポを速くし、リズムを刻む、音高の跳躍を取り入れる」や、「しっとりとした音楽」では、「ゆったりとしたテンポで音高やリズムもなめらかに」などといった音を音楽に構成するために、さまざまな思考を働かせることである。生徒に表現したいイメージをもたせることの必要性は「解説音楽編」の内容からも読み取れる（表1）。

表1 高等学校学習指導要領解説音楽編 音楽Ⅱ 内容A表現

- ア 音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や和音などを付けて、イメージをもって創造的に音楽をつくること。
- イ 音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などを工夫して、イメージをもって創造的に音楽をつくること。
- ウ 音楽を形づくっている要素の働きを変化させ、イメージをもって創造的に変奏や編曲をすること。
- エ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きを理解して音楽をつくること。

本研究においては、歌詞から考えさせていく活動を取り入れ、生徒が表現したい音楽のイメージをよりもちやすくさせていく。また、歌詞のイメージを明確にするため、音階を選択させながら旋律をつくっていく。その過程において、歌詞に合わせて抑揚や音高を考えたり、リズムを考えさせたりするなど、音楽を形づくっている諸要素についての理解を図っていきたい。音階固有の表情や味わいを感じ取ったり、音楽を形づくっている諸要素の働きを捉え、活用していくことを通して、思いや意図をもって表現する力を育成できると考える。

2 創作活動について

(1) 創作について

創作とは「解説音楽編」において、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では「音楽づくり」、中・高等学校では「創作」と示されており、創作の特徴について「実際に音を組み合わせ、音楽をつくり出すことにある」と示している。中地雅之（2009）は創作の授業は、多様に展開することができる活動として表2のように述べている。

表2 創作活動授業展開の方法

- (1) 音を用いた活動 : 手や身体、身の回りにあるものを使って行う音の探求や音遊びのこと。
- (2) リズムを中心とした活動 : リズムアンサンブルやボディー・パーカッションのこと。
- (3) 旋律を中心とした活動 : 音をつなげて旋律をつくったり、音階をもとに旋律をつくっていく活動のこと。**
- (4) 和音を使った旋律づくり : 和音の構成音をもとに旋律をつくる活動のこと。

本研究では、生徒の表現したい音楽のイメージを描く手立てとして、学校生活にかかわりのあるテーマにし、歌詞をつくらせる活動を取り入れていく。歌詞をつくり、旋律をつくるためには創作活動授業展開の方法（3）旋律を中心とした創作活動が適切であると考ええる。その過程で音階固有の表情や味わいを感じ取ったり、歌詞に合わせて旋律をつくることで、思いや意図をもって表現する力の育成につなげていきたい。

(2) 創作活動の具体的な取り組みについて

創作に取り組む方法として、後藤洋（2014）は「枠」が必要であると述べている。ここでいう「枠」とは「創作」のルールを決めることであり、例えば、「創

表3 本研究における創作の「枠」

- (ア) 長さ→**各班8小節、全体で24小節**
- (イ) 拍子→**四分四拍子**
- (ウ) 形式→**二部形式**
- (エ) 音階→**沖縄音階、長音階、短音階、日本音階より選択**

作に使用する音を決める、創作に使用する楽器を決める、曲の長さを決める、最初と最後の音を決める等の方法である。」と述べている。

また、「どう枠をつくるか、その枠の中でいかに生徒たちを自由にさせるかということを基に工夫していくとよい」とも述べている。

本研究においても、生徒がイメージをもち、見通しを立てながら創作に取り組めるように「枠」を決め、活用していく（表3）。

さらに、「枠」を決めることで基本的な知識、技能の習得にもつなげていきたい。

(3) 学習形態について

創作の学習形態として「協同学習」を取り入れる。杉江修治（2011）によると、「協同」とは「心を合わせ、力を合わせ、助け合って仕事をする」と述べている。つまり、協同学習とは生徒が主体的に取り組み、自律的な学びの姿勢で仲間とともにコミュニケーションを図りながら知識を習得していく学習である。さらに、仲間全体のコミュニケーション能力の育成を図ることができる学習である。音楽の授業において、生徒は一つの音楽をつくりあげていく過程において、表現したいイメージを伝えあったり、協同する喜びを感じたりしながら心を合わせ、力を合わせ、助け合っていくことを学ぶ。一人では曲作りに取り組むことが苦手な生徒であっても仲間と協力することで、音のつながり方を考えながら旋律をつくったり、どのようなつながり方がよいのか、表現したいイメージを仲間に伝えあったりすることで、一人で考えるよりもいろいろなアイディアが生まれるだろう。また、曲が仕上がった時の充実感や達成感も共有できるであろうと考える。

以上のことより「協同学習」を「創作」活動へ取り入れることで、生徒同士の学び合いができ、楽しませながら主体的な活動を促すことができるであろうと考える。

3 音楽と学校生活とを結びつけた創作活動

学校の特色を生かした「即売会」と音楽の授業とを結びつけ、曲をつくる創作活動を行う。「即売会」とは、本校で毎月一度行われる学校の特色を生かした学校行事で、生徒が育てたり、つくったりした生産物を一般のお客様へ販売するという取り組みである。生徒たちはその取り組みに対して、積極的にに関わり、楽しみながら主体的に活動している。生徒が主体的に活動している取り組みと、創作活動とを結びつけることができれば、生徒にイメージをもたせることができ、生徒の授業に対する意欲を持続させながら、生徒の思いや意図を引き出すことができると考える。

また、創作曲を「即売会」において活用することで、生徒の充実感や達成感につながり、音楽のよさや楽しさを実感させられるのではないかと。さらに、「即売会」と創作活動を結びつけることを通して生徒に身近な生活と音楽との関わりを意識させ、音が生活に果たす役割を考えさせたり、音楽文化について関心をもたせ、関わろうとする態度を育てていくことで、生徒に生活を明るく潤いのあるものにする音楽の役割を実感させたい。

Ⅲ 指導の実際

1 題材名「思いや意図をもって音楽をつくろう」

2 題材の目標

- (1) 創作活動へ関心をもち、主体的に取り組むことができる。
- (2) 音楽の諸要素と曲想との関わりを理解し、表現したい音楽を工夫することができる。
- (3) イメージに合わせた旋律をつくるために音階を選び、その音階を基にした旋律をつくることのできる。

3 創作の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能
音楽を形づくっている要素（リズム、旋律、構成）の働きの変化に関心をもち、イメージをもって音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素（リズム、旋律、構成）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や、雰囲気などを感受しながら、音階の特徴を生かして旋律をつくったり表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫し、どのように音楽をつくるかについて表現意図をもっている。	音階を選んで旋律をつくるために必要な創作の技能（課題に沿った音の組み合わせ方、記譜の仕方など）を身に付け、創造的に表している。

4 指導と評価の計画（全 10 時間）

次	時 間	主な学習活動	指導上の留意点	学習活動の即した〔評価規準〕 (評価方法)
第一次	創作曲のテーマを決めよう			
	第1	・CMソングを聴いて、曲の特徴に気づき、ワークシートにまとめる。	・CMソングを聴かせ、反復、変化に気づかせる。	・CMソングに関心をもち、特徴をとらえている。
	第2	・創作曲のテーマを決める。	・音源を楽譜に直し可視化できるようにする。 ・学校生活や学校行事などにおいて、活用できるテーマになるよう促す。	・学校生活や学校行事などにおいて自慢に思っていることや、生徒の気持ちに添ったテーマになっている。 [ア] ワークシート
第二次	テーマに沿った作詞をする。			
	第3	・テーマに沿った作詞をする。	・各テーマに沿って3つの班に分けそれぞれ短歌の音を基本に、歌詞を考えるよう促す	・各班で主体的に取り組むことができているか。
	イメージに合った音階を選び、旋律をつくろう。			
	第4	・音階について理解する。 ・歌詞のイメージに合った音階を選択させる。	・音階の特徴を理解するため、教科書、スライド、ピアノを活用する。	・歌詞のイメージや表現したい音楽をイメージして音階を選ぶことができる。 [ア]ワークシート
	第5	・歌詞に合わせてリズムを考える。	・各班ごとに8小節を考えるよう促す。	[イ]行動観察・ワークシート ・歌詞に合ったリズムを組み合わせたリ、考えたりすることができる。
	第6	・歌詞やリズムのイメージに合った旋律をつくる。	・キーボードやリコーダーを活用し、実際に音の組み合わせを試しながらつくるよう促す。	・歌詞やリズムのイメージに合った旋律を考えることができる。 [ウ]行動観察・ワークシート
	第7	・歌詞の抑揚に合わせて旋律になっているかを考え曲の構成を工夫する。	・全員で歌詞の読み合わせをして、歌詞の抑揚をワークシートへ記入し、旋律と結びつけているかを考えるよう促す。	・音楽を形づくっている要素について知覚し、感受している。[イ]
	第8	・各班で旋律を見直す。		・表現したい音楽をイメージして工夫しようとしている。 [ウ]行動観察・ワークシート
第三次	創作曲を見直し、録音しよう。			
	第9 第10	・創作曲の構成(反復や変化)を確認し、曲の見直しをする。 ・創作曲を演奏し、録音する。 ・感想まとめ	・創作曲を楽譜で確認し、班に分かれ見直したい部分があれば見直しをさせる。 ・創作曲について表現したいイメージを大切に演奏するよう促す。	・音楽を形づくっている要素を知覚し、旋律を工夫することができる。 ・表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫することができる。 [イ]ワークシート[ウ]行動観察

5 本時の指導 (7・8/10)

- (1) 本時の目標
音楽を形づくっている要素について知覚し、歌詞の抑揚に合わせた旋律になっているかを考えることができる。
- (2) 授業仮説
ワークシートを活用し、歌詞の抑揚を可視化することで、歌詞の抑揚に合った旋律を考えることができるであろう。

(3) 本時における評価規準（7・8/10 時間目）

主な学習活動	評価規準とその方法	学習活動における具体的評価規準		
		A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (支援の具体的方法)
仲間と協力し、歌詞の抑揚に合わせた旋律になっているかを考える。	仲間と協力し、歌詞の抑揚に合わせたリズムや旋律になっているかを考えることができる。	仲間と協力して、歌詞の抑揚に合わせたリズムや旋律を構成（反復、変化）を考え工夫することができる。	仲間と協力して、歌詞の抑揚に合わせたリズムや旋律を考えることができる。	仲間と協力して、歌詞の抑揚に合わせたリズムや旋律を選択するよう促す。

(4) 本時の展開

時	過程	学習活動	留意点(手立て)	主な評価の方法
第7時	導入	・ 本時の目標を確認する。	・ 前時までの内容を確認し、歌詞の抑揚に合わせた旋律になっているかを考えることを伝える。	
	展開	・ 「ビリーブ」の楽譜を見て、歌詞の抑揚に合わせた旋律になっていること、リズムや旋律の反復、変化について理解する。 ・ 全体で作曲の構成を確認する。 ・ 全員で作曲の歌詞を読み合わせ、歌詞の抑揚をワークシートへ記入する。 ・ 各班に分かれ、歌詞の抑揚に合わせた旋律になっているかを考える。	・ 歌詞のうえに、音の上行下行を線で表し、リズムや旋律の反復や変化、サビの部分を書き込んだ楽譜を使用する。 ・ 各班ごとに8つの区切りになっているかを確認する。 ・ 歌詞の内容で一番訴えたい部分をサビにするよう促す。 ・ 歌詞の上に歌詞の抑揚を線で表すよう促す。 ・ 歌詞の抑揚を線で表した図をもとに、音やリズムを見直すよう促す。	・ 音楽を形づくっている要素について知覚し、感受しようとしている。 ワークシート
第8時	展開	・ 各班で、旋律を見直す。 ・ 各班ごとに、旋律を発表する。 ・ 各班ごとにワークシートをまとめる。	・ 作曲のサビ部分をどういうイメージにするかを考えさせ、曲の全体の構成をまとめる。 ・ キーボードやリコーダーを活用し、音を出し試しながら見直しをさせる。 ・ 演奏が難しい場合は、教師がピアノで旋律を弾く。	・ 表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫することができる。 行動観察 ワークシート
	まとめ	・ 本時の学習を振り返る。	・ 本時の学習の成果と課題について確認する。	

6 仮説の検証

研究仮説に基づき、表現領域において、音楽と学校生活を結びつけ、作詞、作曲を行う創作活動を行ってきた。また、作曲を学校生活において活用するという工夫を図ることで、生徒の思いや意図をもって表現する力を育むことができたかについて、創作の方法、ワークシート、検証授業前後のアンケート調査や行動観察により検証する。

(1) 生徒にイメージをもたせることができたか。

① テーマについて

生徒に表現したいイメージをもたせるために、学校生活に結びつけたテーマにし、イメージを、より膨らませることができるようにした。事前調査において「中部農林高校の自慢できること、特色は何ですか」について「挨拶が上手、笑顔いっぱい、即売会、実習の授業、たくさんの学科がある、生徒会が一生懸命」などの意見が出たことから、生産物（食品や植物）や、動物（鶏や犬の飼育）、FFJ（日本学校農業クラブ連盟全国大会）に対して、誇りに思っていることがわかった。やはり、学校生活に結びついている内容をテーマにすることは、生徒に表現したいイメージをもたせる手立てとして適切であった。また、学校生活に関連のあるテーマにしたことで生徒たちは各学科の実習の様子について活発に話し合いテーマについて真剣に考える姿があった。「野菜」「学科の紹介」「動物」「笑顔」「青春」「仲間の大切さ」など、自分たちをイメージしたキーワードを挙げ、それを組み合わせテーマを決めていく様子が見られた。自ら話し合いを進めていく中で、テーマと歌詞の内容を表4のように決めることができた。

② 歌詞について

各班5名ずつ3班に分け活動を進めた。歌詞の内容については、生徒たちと話し合い表4に示している内容を1番、学科の紹介、2番、仲間の大切さ、3番、野菜と笑顔・好奇心旺盛、の3つに分け、自分の考えたい歌詞の内容で班を選択させた。歌詞の作成は、他教科で習得している短歌の音「五、七、五、七、七」を基本に考えさせた。短歌の知識を活用したことで、スムーズに歌詞を考えることができていた（表5）。

学校生活に関連することをテーマにして、歌詞を考えさせたことで、生徒は主体的に取り組んでいる自分たちの活動に対して改めてその良さを感じることができた。また、一つのテーマをもとに全員で歌詞をつくったことで、その思いを共有することができ、表現したいイメージをもたせることに有効であったと考える。

(2) 創作の方法について

「これまでに創作したことがありますか」という事前アンケートについて「ある」と答えた生徒は2名、「ない」と答えた生徒は12名であった（図1）。また「自分で創作（作曲）をする場合に知りたいこと、教えてほしいことは何ですか」という調査については「何から始めればよいのか教えてほしい」など「創作の方法」と答えた生徒がいたことから、やはり創作の「枠」を決めることは必要であると実感した。以下「枠」の手順に沿って検証を行っていく。

① 枠(ア)長さについて

曲の長さは、各班で8小節の旋律をつくり、全部で24小節の長さとした。曲の構成（反復、変化）や音楽の流れを意識して、全体のまとまりを考えながらつくることを想定し、8小節がふさわしいと考えたためであった。しかし、どの班においても仕上げるまでに時間がかかっていた。これは、生徒へ、小節と歌詞との関連を考えさせることができなかったことが要因であると考える。

表4 創作曲のテーマと歌詞の内容

テーマ
「青春ベジタブル＝_＝（ねこ）」
歌詞の内容
①学科の紹介
②仲間の大切さ
③野菜と笑顔
④好奇心旺盛

表5 創作曲の歌詞

「青春ベジタブル＝_＝ねこ」
1 資源もあるよ フラワー バイオ
輝く測量 優しさいっぱい
おいしさいっぱい
みんなで目指せスペシャリスト
2 仲間とは 大切なもの ありがとう
学ぶことができたんだ
君と私はベストフレンド
3 まーさんどー まーさんどー
たんせいこめた ベジタブル
食べたら みんな
ビッグスマイル
ビッグスマイル

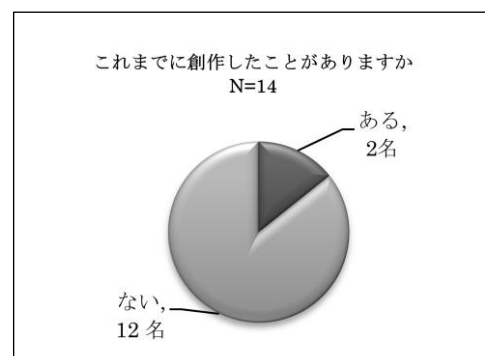


図1 創作についての経験

② 枠(イ)拍子について

拍子については、小学校や中学校でも経験したことのある基本的な四分の四拍子とした。これまでの指導を通して、生徒は小節と拍の関わりについて理解していた。しかし、音符で書き表す記譜法については理解が不十分であるため、リズムを言葉で書き表せるようワークシートを工夫した。その工夫により、拍子に合わせ、リズムを書き表すことができるようになった。

③ 枠(ウ)形式について

まとまりのある曲に仕上げるため、基本的な形式である二部形式とした。生徒は形式について理解することはできていたが、歌詞と形式を結びつけて考えさせることができなかったため、二部形式の曲として仕上げるができなかった。その理由としては、歌詞を仕上げた後に、歌詞と構成（ABA'）を結びつけ、旋律をつくる手順の確認が行えなかったためである。今後は習得した知識を活用できるように授業計画を立てる必要がある。

④ 枠(エ)音階について

基本的な調である長音階（ハ長調）と短音階（イ短調）、三線の授業で学習した沖縄の音階、日本の民謡で用いられている日本の音階の基本的な4つの音階の中から選択させた。作曲に対するイメージについて生徒からは、「明るい曲にしたい」、「楽しい曲にしたい」、「アップテンポな曲にしたい」、「中農らしさを出したい」、「合いの手を入れたい」などの意見が出された。

次に、作曲のイメージに合う音階を個人、ペア、全体で考え、意見を発表してもらった。ほとんどの生徒が、「ハ長調」と「沖縄音階」を選択した。全員での話し合いでは、「中農らしさを出したい」、「FFJ（日本学校農業クラブ連盟全国大会）でも活用したい」、「合いの手を入れたい」、「方言を入れたい」等の意見が出され、沖縄の音階に決定した。いくつかの音階を比較させながら音階固有の表情や味わいを感じさせ、生徒のイメージに合う音階を選択させたことで作曲に対するイメージがより明確になっていった。

(3) 旋律をつくる

歌詞を作成したときの3つの班に分かれて活動させた。今までに経験したことのあるキーボードや、リコーダーで実際に音を出しながら歌詞やリズムに合う旋律を考えさせた。楽譜を書くことが苦手な生徒であっても歌詞のイメージに合う旋律を考えることができるように、歌詞の上に階名とリズムを書き表せるワークシートを工夫した(図2)。生徒は、歌詞のイメージに合わせて旋律とリズムを考えることができ、記録することができた。

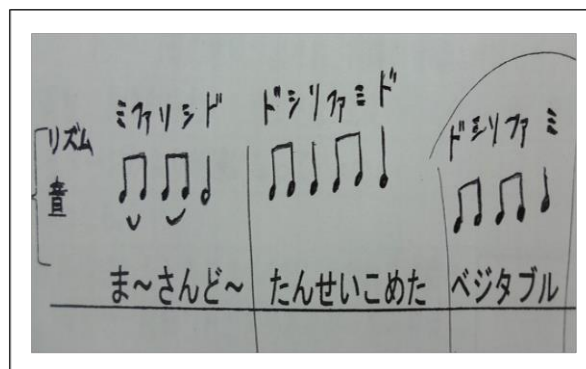


図2 工夫したワークシート

しかし、ほとんどの生徒が沖縄音階「ド、ミ、ファ、ソ、シ、ド」を歌詞に合わせ単純に上行、下行させた旋律をつくっていた。このことから、歌詞の抑揚と旋律の関連について生徒に気づかせる必要があると考えた。歌詞の抑揚にあわせた旋律を引き出す手立てとして、既習曲「ビリーヴ」を取り上げ、歌詞の抑揚にあわせたリズムや旋律、曲のフレーズ、反復のリズムによる強調の効果、音のつながりなどを歌詞と音との関わりについて考えさせた。ワークシートについても、小節の区切り、歌詞の抑揚と旋律、リズムとの関連を意識したワークシートにつくり直した(図3)。

抑揚を表す		
歌詞	たべたら	かんぽ
音	ファドミソ	ファファド
リズム		

図3 工夫したワークシート

そのことにより、歌詞に合わせて抑揚を書き表すことができ、イメージを膨らませ、旋律を見直すことにつながることができた。全体で曲について確認するため、生徒の書いたワークシートをもとに、教師が五線譜へ書き写した。図4で生徒の変容の一部を提示する。

①については、軽快な感じにしたいため付点のリズムとし、記譜の仕方に誤りがあったため、全員で付点のリズムの書き方について確認した。②については、「フラワー」という歌詞にあわせ、音を下降させた旋律になっていたが、歌詞の抑揚に合わせ、音高を工夫した旋律となった。次に、③の「バイオ」、「いっぱい」の部分については、気持ちの高まりと強調を表現したい、という思いから、リズムの反復を取り入れ、音高を見直した旋律となった。

以上のことから、生徒の実態に合わせてワークシートを工夫したり、既習曲を取り上げ、音楽の諸要素について知識の理解を図り、それを活用させたことで、作曲のイメージに合わせた旋律をつくることができたと考える。

The figure displays a musical score in two parts: 'Before Change' (変容前) and 'After Change' (変容後). The score is written on a five-line staff with a 4/4 time signature. The lyrics are in Japanese. The score is divided into sections marked ①, ②, and ③. Section ① shows a change from a dotted rhythm to a more complex one. Section ② shows a change from a descending melody to one that follows the pitch of the lyrics 'Flower'. Section ③ shows a change from a simple melody to one with repeated rhythms and higher notes to express excitement for 'Bio' and 'A lot'.

図4 ワークシートを基に作成した楽譜

しかし、全員で旋律を見直す過程において、教師が生徒の意見に対して、指導すべきポイントの焦点化を図ることができず、生徒の思考を持続させることや時間を有効に使うことができなかった。今後は、継続的に創作における基本的な知識の習得についての指導を行うこと、指導すべきポイントの焦点化を図っていく必要がある。

このように創作活動において「枠」を決めたことで、生徒が見通しをもちながら、創作活動に取り組むことができた。また、表現したいイメージを描き、描いたイメージに合うように、根拠をもって音を音楽へと構成していく過程を通して、思いや意図をもって表現する力を育むことができた。創作において、生徒の実態を踏まえ「枠」を決めることは必要であると考えます。

(4) 学習形態について

本検証における学習形態については、ペア学習とグループ学習を取り入れた。テーマ、音階についてはペア学習で行った。普段は皆の前で意見を発言することが苦手な生徒でも、ペアであることで自分の考えを相手に伝える姿が見られた。ペア学習を適切に取り入れたことで、生徒の思いや意図を引き出すことにつながった。歌詞、旋律、についてはグループ学習で行った。歌詞については、5名ずつのグループにし、3つの班に分けた。各班ごとに歌詞の内容からイメージする言葉を探し、それを短歌の音に当てはめつなげていく様子が見られた。生徒に好きなテーマを選択させ、グループ編成を主体的に考えさせたことで、楽しみながら歌詞を考えることができていた。

旋律をつくる、については、歌詞を考えた3つのグループに分かれて活動を進めた。キーボードやリコーダーで実際に音を出しながら旋律をつくる場面で、各グループに進度の差が見られた。これは、生徒の創作における基本的な知識、技能に差があり、グループにおいてバランスを図ることができなかったためである。活動内容を踏まえ、グループ編成を検討する必要がある。

アンケート調査の一部からは「みんなで考えて、でき上がっていく感じがおもしろい」、「皆で仕上げるので楽しかったです」という感想があった。事後調査において「一人で考えるよりも楽しく活動できたか」について、全員の生徒が「よくできた、どちらかといえばできた」と回

答していた。

以上のことから、学習形態を工夫しペア学習とグループ学習を取り入れたことで、生徒の主体的な活動に結びつけることができた。

(5) 音楽と学校生活とを結びつけた創作活動について

本研究においては、音楽と学校生活とを結びつけた創作活動として、学校の特色ある行事「即売会」と創作とを関連づけて取り組んできた。導入においては、生徒が音楽と生活とが結びついていると捉えているCMソングを取り上げ、生徒に作曲に対しての具体的なイメージをもたせ、創作に必要な基本的知識の習得につなげるようにした。生徒はCMソングの特徴について「うたいやすい速さである」、「うたいやすい音の高さである」、「覚えやすいメロディーである」などの意見を出した。次に楽譜を配布し、音楽を特徴づける効果について考えさせると、「同じリズムが使われている」、「同じようなメロディーだけど、少しだけ違う音になっている」などの意見があり、音楽の諸要素（反復、変化）について自ら気づくことができた。

このことより、CMソングを導入に取り入れたことで生徒に表現したいイメージをもたせることができ、創作に必要な基本的知識の習得に有効であったと考える。

また、学校生活をテーマにしたことで、作曲に対するイメージを広げることができた。作詞、作曲をする過程においては、音楽固有の表情や味わいを感じ取ったり音楽を形づくっている諸要素について理解し、歌詞の抑揚に合わせ音高やリズムを考え工夫することができた。根拠を持って自分なりの表現を工夫し、思いや意図をもって表現する力につなげることができたと考える。

事後アンケートにおいて「作曲を学校行事に活用することについてどう思いますか」については「ちょっと恥ずかしい気持ちはあるけれど、自分たちのつくった曲が流れるのは嬉しい」「自分たちで作詞、作曲した曲をみんなが聴いてくれるから嬉しい」などの意見があったことから作曲を学校行事において活用を図るという工夫によって、生徒に充実感、達成感を味わわせることができたと考える。

さらに、「今までは即売会に音楽がなかったけど、これからは音楽があるので、雰囲気が違うと思う」という生徒の感想から、生徒が音楽と生活との関わり気づき、音楽のよさや楽しさを実感する機会につなげることができた。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 音楽と学校生活とを結び付けた創作活動を行うことで、生徒の意欲、関心を高め、主体的に学習に取り組ませながら、生徒のイメージを引き出すことができた。
- (2) 創作の「枠」をつくることで、学習への見通しをもたせ、創作の基本的な知識、技能、方法を身につけさせながら、思いや意図をもって表現する力を育むことができた。
- (3) 協同学習を取り入れることで、生徒の主体性をはぐくみ、充実感や達成感を味わわせることができた。



写真1 グループ学習の様子

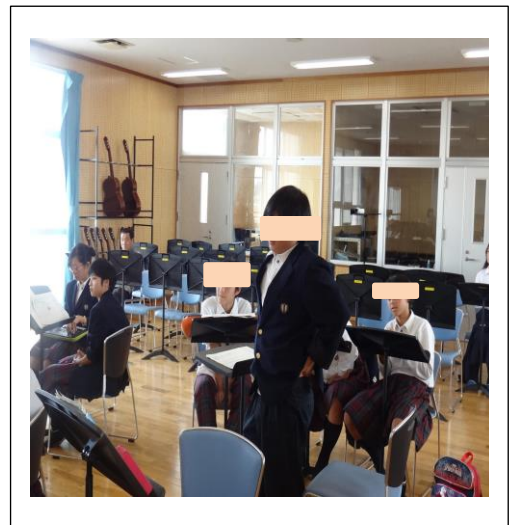


写真2 発表の様子



写真3 中農市の様子

2 課題

- (1) 創作の基本的知識、技能、方法の習得について、表現領域、鑑賞領域における指導計画の工夫。
- (2) 創作活動についての継続的な研究と取り組み。

〈参考文献〉

- 小村聡 2015 『中学校音楽科授業成功の極意』 明治図書
- 中等科音楽教育研究会 2014 『教育音楽中学・高校版』1月号』 音楽之友社
- 今村央子 2012 『創作』成功の授業プラン 明治図書
- 杉江修治 2011 『協同学習入門』 ナカニシヤ出版
- 野村誠 2010 『音楽づくりのヒント』 音楽之友社
- 原田徹・酒井美恵子 2010 『中学音楽が魅力的に変わる授業プランの新モデル 30』 明治図書
- 音楽の授業づくり研究会 2009 『新音楽の授業づくり』 教育芸術社
- 熊木眞美子 2006 『子どものコミュニケーション力を高める！音楽遊びベスト 40』 明治図書
- 川邊昭子 2005 『学力の質的向上をめざす音楽科授業の創造』 明治図書